朝日俳壇 歌壇

高山れおな選

戦の中の鮮やかなるマグマ　（朝倉市）深町　明
狸汁我が子を食らふサトゥルヌス　（大村市）小谷　一夫
ぼろ市のコロッケ喰いてたたずめり　（川崎市）小関　新
☆エジプトの王子の顔のかまど猫　（福岡市）釋　蜩硯
凩や背中を灯す警備員　（多摩市）田中　久幸
冬山のいやに不躾な斜面　（アメリカ）ケビン　バロール
枯蓮の底に沈みし昼の闇　（柏市）田頭　玲子
卒寿なる掌の冷たさよ小ささよ　（大牟田市）古賀　紀子
湯気上げる冬の湧き水山歩き　（ドイツ）ハルツォーク洋子
雪が降る人忘れずの山に降る　（沼津市）石川　義倫

【評】深町さん。ひびわれの奥に見える血の色。戦は不快でも、マグマの見立ては生命感を帯びる。小谷さん。中七下五は、ルーベンスやゴヤも描いた神話由来の画題。狸汁からの飛躍に一驚。小関さん。素直なスナップだが、何だかかわいい。

小林貴子選

ヴィーナスに三日月寄りて冬の恋　（加須市）坂入やすのり
冬の夜のほぼ満月のほぼが好き　（三島市）高安　利幸
子鬼出でやんややんやの花祭　（神奈川県大磯町）前田　恵美
駄々こねてリハビリ休む寒い日は　（茨城県河内町）吉村　巌
火袋の扉緑青虎落笛　（枚方市）清水　博義
冬ざらバス停の名は鬼死骸　（大崎市）笠原　直子
原爆ドームやそれでも春を待つ　（広島市）瑞木　綾乃
かつて海のかつて田んぼの冬木立　（浜松市）尾内甲太郎
なりたくてなつたわけです雪女　（葛城市）山本　栄子
解釈は選者の勝手闇夜汁　（新居浜市）越智　勝利

【評】一句目、金星をヴィーナスと呼べばにわかに恋の気分に。二句目、厳密に考えず「ほぼ」でいこう。三句目の「花祭」は折口信夫が注目した三遠南信地域の冬の行事。四句目、毎日こつこつ続けるのが大切だが、たまには休んでもいいよ。

長谷川櫂選

戦にも慣れてしまふか屋根の雪　（新潟市）齋藤　達也
☆エジプトの王子の顔のかまど猫　（福岡市）釋　蜩硯
死にたいといふ相談の息白し　（さいたま市）與語幸之助
人拒む故郷の氷瀑友不知　（埼玉県宮代町）酒井　忠正
まづ子をと拭きてゐる間の湯ざめかな　（鹿沼市）鹿沼　湖
雪折れの庭木集める朝かな　（ドイツ）ハルツォーク洋子
風神と火の神もつれ合ふどんど　（玉野市）勝村　博
いづくよりこの流木や浜焚火　（千葉市）牛島　晃江
小春日や千の手ゆるむ菩薩像　（広島市）越智　隆義
愛されず耳垂らしゐる兎かな　（東京都世田谷区）須藤　渉一

【評】一席。人間は慣れる動物。それが怖い。ウクライナもガザも。二席。みてみたし王子に似たる猫の顔。八十七歳、絶好調。三席。誰にでもそんな日がある。それを越えてみな生きている。十句目。耳も口ほどに……。それとも深読みか。

大串章選

一年の化粧を落とし山眠る　（京都市）室　達朗
露天湯の先客欅落葉のみ　（前橋市）武藤　洋一
忙しさも一夜明くれば淑気かな　（札幌市）長谷川淑子
村里にけもの放ちて山眠る　（奈良市）田村　英一
夭折の人の自画像寒昴　（新潟市）鶴巻　悦子
幼子を銀杏落葉に解き放つ　（瀬戸市）末武みどり
熱燗に夢あたためし若き日よ　（川越市）大野宥之介
冬もみぢ水に浮くもの映るもの　（川崎市）正木むさを
終列車発ちしホームや冬銀河　（尾張旭市）古賀勇理央
風花や泣き足らぬ子を肩車　（浜松市）野畑　明子

【評】第1句。一年の「化粧を落とし」が言い得て妙。山笑い・山装う季節が終わると山は枯れ深い眠りに入る。第2句。露天湯に浮かぶ「欅落葉」を「先客」と言った所がおもしろい。第3句。正にその通り、一夜で一転して瑞気がただよう。

第41回 朝日俳壇賞

2024年の入選句から、4人の選者が1句ずつ選びました。受賞者には、賞状と記念品が贈られます。

高山れおな　選

野遊のことろことろや日のとろろ　（高松市）渡部　全子

暖かな春の野に、子どもたちが楽しく遊んでいます。こんな平和に、ふと鬼の気配がないかと不安がよぎります。「ことろことろどのことろ」。でもそんな不安も穏やかな日差しにたわいなく消えてゆくのです。

〈評〉春日遅々の気分をかきたてるリフレイン。甘く、気怠く、ちょっと不吉で。

小林貴子　選

鴨鍋や仕留めるまでを聞かさるる　（千葉市）桐畑　佳永

鴨肉とネギの鍋が煮立っており、よい匂いがしている。客が次々と鴨を仕留めるまでを質問するので、招待者はつい長々と話をしている。こちらは涎が長々と垂れ困っている。そんな滑稽なシーンを思い出して作った。

〈評〉鴨を仕留めるまでの話はなまなましい。食べること、生きることを思う。

長谷川櫂　選

腸を晒すアメリカ秋黴雨　（東京都足立区）三角　逸郎

自分第一の考えが世界を席巻しています。世の中はどうなっていくのでしょうか？　剝きだしの本音が世界を破滅させないことを切に願います。四人の孫たちの人生が平和の光に照らされますように。祈りの一句です。

〈評〉時事問題は新聞俳壇の大事な題材。昨年最大の珍事を鋭く詩的に描く。

大串章　選

極楽も地獄も忘れ日向ぼこ　（長崎市）下道　信雄

ふり返れば、私の一生は極楽と地獄の間をうろうろしていただけのように思う。最近、極楽も地獄も霞んで遠くになった。そのせいか、何処かが軽くなったような気がする。その心境が、この句を生んだのかとも思う。

〈評〉無念無想の日向ぼこ、無我の境地にひたる。喧噪を離れた至福のいっとき。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。